アイマイ物語

かマぼこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイマイ物語

【Ｎコード】
Ｎ６００４Ｕ

【作者名】
かマぼこ

【あらすじ】
彼は唯、『曖昧』だった、マイナス以上プラス未満、これはあやふやで曖昧な男の子の物語
※この小説は江迎ちゃんといちゃいちゃするだけの小説です

現在、改編?中です。　内容変わっちゃうかもしれません。　ごめんなさい

プロローグらしい（前書き）

この能力強くね？って思ったけど案外弱い

プロローグらしい

【曖昧】

はっきりせず、あやふやな時に使われる。
『曖』も『昧』も「暗い」を意味する字で、暗くて確かではないところから『はっきりしない』と『不明確』などの意味で使われる。

これはその『曖昧』過ぎる男の子の話だと思われる。

男の子と女の子が仲良く手をつないで歩いている。

「えっ！？ヤマアラシとハリネズミって違うの？」

茶髪の男の子がどうでもいいことにオーバーなリアクションをした。

「そうだよ。　羊君、ヤマアラシはモグラ科でハリネズミはハリネズミ科なんだよ。」

どこか気持ち悪い雰囲気のピンクの髪の女の子がそう答える。

あはははは～と二人はバカップルみたいに笑っていた。

茶髪の男の子……『帰山（かえるやま）　羊（ひつじ）』がたぶん、この物語の主人公だろう

今から11年前、『帰山　羊』が生まれた

普通の赤ちゃんに見えるのだが、不思議なことに彼が近くに居る時『言い切る』ことが出来なくなるのだ。　それ以外は普通だった。

羊の家族は最初は気付いていなかったのだが日に日にその『異常』は酷くなっていた。

羊が3歳になったころ、その『異常』に気付き、気味が悪くなり、羊は捨てられた

それぐらいで捨てたのかと思う人がいるだろうかその『異常さ』はあまりに酷いものだった。

何もかもが完璧に出来なくなるのだ、会話も仕事も趣味も何もかもだ、すべて『曖昧』になってしまう

それはそれは酷いものだった。

努力も才能も『曖昧』、正義も悪も『曖昧』、希望も絶望も『曖昧』

羊の家族はたぶん羊が原因だと決めつけ、羊を病院に連れて行った、家族の縁を切って…

「……で？ここはどこなんだろう？」

羊が眠っている間に病院に連れて行かれたので羊はここがどこかもわからないし、家族に捨てられたこともわからない。

「病院かな？」

診察室と書いてある部屋を見てそう言った。

「何やってんのかな…よし、突撃！」

てい！と羊はドアを開けた。

〜診察室〜

「…先生聞いてください。　私がこの手で触れたものはなんであれ、生物であれ無生物であれ有機物であれ無機物であれ――――腐ってしまうんです。　可愛いわんちゃんを撫でても可愛い猫ちゃんを抱いてもみんな腐って死んでしまうんです。」

「私も死んだ方がいいんでしょうか、先生」

ピンクの髪の女の子がそう言った。

「いいわけないでしょ」

先生はそう答えた。

「…！？だって「お邪魔しまーす！！」え？」

突然診察室に男の子が飛び込んできた。

「ちょ…勝手に入ったら駄目だよ君！」

「えー…それより、父さんと母さん知らない？気付いたらここに居たんだけど…ってあれ？なんだこれ？」

羊はズボンのポケットに何か入っているのに気付き、それを取りだした。

「ちょっと貸して！」

「あっ！」

先生は羊の持っていた紙を取り上げた。

「えっ……」

その手紙には【この子を拾ってください】と書いてあった。　短いがわかりやすい手紙だった。

「何て書いてあったの？」

羊は真剣な顔をしている先生を見て不思議そうに首を傾げた。
まだ羊は2歳で漢字も読めないだろうが雰囲気でわかってしまうだろう。

自分が家族に捨てられたと……

「（しかもこの子も捨てられてるのよね……）」

そう、診察室に居た女の子、『江迎　怒江』は家族に捨てられているのだ。　しかもそれを本人は知っている。

「おーい、瞳～いるかー」

黒髪ストロングの女の人が入ってきた

「（どうしてこのタイミングで……）勇気ぃ……なんなの…」

「お腹がすいたんだ。」

勇気と言われた女の人がそう言った。

「そーれーだーけーのーこーとーで……呼ぶな！ご飯ぐらい自分で作れ！」

「だって～瞳の作るご飯おいしいんだもん！」

勇気と言われた女の人は子供のように口を尖らせて言った。

「『だもん』じゃないでしょ！子供の前で……もう！」

「子供？ああ、仕事中だったのか、すまんすまん」

ははははっと勇気が笑った。

「そのことなんだけどこの子達親に捨てられたのよ」

「捨てられた……か最近の親は酷いな……」

「私も最近の親なんだけど……」

瞳ははぁ…とため息を吐きながら言った。

「い……いや、瞳は違うぞ！良い親だ！ご飯おいしいし…」

「はぁ…とにかくこの子達は私が育てるわ」

「いや……この子達は私が引き取ろう！ちょうど子供が欲しかったんだ」

「えっ……でも」「瞳には息子がいるだろう？3人になったら大変だろう？」「　うっ…」

「決まりのようだな」

「先生、俺とこの可愛い女の子は無視ですか～」

おーいと言いながら羊は手を振った。

「か…可愛い！？　可愛いだなんてそんなの言われたの初めて…まさかこれが運命の出会いなの！　と言う事はこの人は白馬の王子様！　これが運命なのね！　ずっと絵本でしかないのだと思っていたけどまさに今！　そう今！　ここに運命の出会いが起きたのよ。そう全て偶然じゃなく運命、これからずっと私はこの人を愛してこの人はずっと私を愛してくれるのね！　今まで腐ってしまえばいいと思ってた神様ありがとう！　こんな運命を与えてくれて！」

女の子が真っ赤な顔で息継ぎなしで言った。

「せっ……先生！！女の子の様子が！」

羊があわてて叫んだ。

「少年、これはな……恋の病なんだ！」

勇気がドヤっとした顔で言う。

「鯉の病……危険な気がする！早く先生ー！！」

羊が危険だと勘違いして余計にあわてて叫んだ。

「勇気ー馬鹿なこと言わないの、この子は大丈夫よ安心して、それより……」

瞳は深刻そうな顔をした。

「あ」「お前捨てられたぞ」「勇気！？」

「えっ……それって……」

羊からいやな汗が流れる。

「おお！3歳なのに賢いなーお前！ほらこれ、漢字で拾うと読むんだがわかるか？」

勇気は羊に手紙を渡した。

「勇気！なんでこんな……」「こういうもんは早めに言っておいた方がいいだろ「……」

勇気の真剣な顔を見た瞳は何も言えなかった。

「そうか……俺は『たぶん』捨てられたのか……」

羊は目を虚ろにしながら言った。

「たぶんじゃないぞ少年」

「何でいったんですか？そのことを俺に……」

「何でって、いや……先に」「言わなかったら『曖昧』でよかったのになぁ……」

羊がそう言った瞬間、瞳たちに異変が起きた。

「《自分の名前が曖昧にしか思い出せない！？》」

いや、他にも思い出や生まれた場所も家族の顔も何もかも『曖昧』にしか思い出せない。

「｛何もかも曖昧にすれば｝＜こんなにも嫌な思い＞『しなくて済んだのに！！』」

羊が勇気に殴りかかった。

「ふむ……勇気だけは認めよう少年……『弱パンチ』！！」

勇気は羊を思いっきりぶん殴った。

「ぐにゃ！？」

羊はぶっ飛ばされた、病院の壁を突き破り駐車場にあった車に激突した。

「こんの……馬鹿勇気！！３歳児を殴るな！！児童虐待で捕まるぞ！！」

そのときの瞳の顔は般若のようだったと後の勇気が語った。

「いやーまさかピーマンとパプリカって違うんだなー。　てっきり第二形態とかそんなこと思ってたよ。」

「まったく……羊君は子供だねー、でもそこがいいんだけどね……

あははっと笑いながら少年たちが歩いている。

「「ただいまー勇気さん！！」」

「お帰り～羊君に怒江ちゃん。　肉は買ったの？肉は」

『帰山　羊』、彼は『曖昧』で『あやふや』で『江迎（えむかえ）　怒江（むかえ）』、『愛等（あいとう）　勇気（ゆうき）』と共に暮らしている。

1話かもしれない（前書き）

短いね…

1話かもしれない

こんにちは。　いや……朝見てる人にはおはようございますだし、おはようございます。　あっ……でも夜見てる人ならこんばんわだな……

……

改めましておはようございます。こんにちは。そしてこんばんわ。皆知ってるかもしれないけど知らないかもしれない羊です。　プロローグでいきなりぶん殴られたあの羊です。

あれから俺をぶん殴った愛等さんに飼われることになりました。怒江ちゃんも一緒です。

今、愛等さんの家に向かっています。

「ここが君たちの家だ。」

おお！普通……この人ならもっと派手な家かと思ったよ。

「ここが私たちの家庭を築く場所か、いい家ねいい家よ。　私たちの家庭を築くのにピッタリだわ。　大き過ぎず小さくもない普通、ああ、いいわ、普通っていいわ。　そして私と羊君は普通で普通の幸せの家庭を築くの。　神様が応援してくれてるんだから頑張らないとね！」

怒江ちゃんから真っ黒いオーラが出てるように見えるんだけど……気のせいだよね？

「羊君！君には家事を任せようと思うのだが！」

愛等さんが指が俺に指を指しながら言った。

「怒江ちゃんはまぁ、仕方ないよね…」

腐っちゃうからなぁ…『荒廃する腐花（ラフラフレシア）』、触れたものはなんでも腐らせる能力、有機物も無機物もなんでもだ。

「……愛等さんは？」

愛等さんは関係ないよね……絶対、言い切れる。

「私はできん！！」

「言い切るんですか！！」

どや顔で言うなどや顔で……

「ああ、そうだ。　羊君、晩ご飯作ってくれ」

「3歳児にご飯作るように頼まないでください……」

これ訴えられるんじゃないか？

「12歳しか離れてないんだから大丈夫だろ」

「「15歳なの！？愛等さんって！」」

さっきまでぶつぶつ言っていた怒江ちゃんも驚いた。　そりゃそうだろう。　どこからどう見たって大人だ、絶対瞳先生より年上だと思ってたし……

「何だよ～サザエさんとカツオくんの歳の差の方が離れてるんだぞ～」

１歳だけしか変わんねえよ……

「兎に角、晩ご飯だ！晩ご飯！早く作ってくれよ～、羊君は３歳児に見えないから大丈夫だって～、頼むよ～」

３歳児に料理作ってくれって頼む１５歳って……

「……はーい」

初めてのクッキングです。

こんにちはございます。　いや…こんにちはにございます付けたっけ？

……おはようございます。　こんにちはございます。　こんばんわございます。

愛等勇気だ。　あっ…愛等勇気です。　もういいや、愛等勇気だ。

３歳児をぶん殴ったあの勇気だ。

いや～あの時は大変だったぞ。　瞳に怒られたり、殴られたり、

縫いつけられたり
だって、羊君の能力が厄介だったし、お腹すいてイライラしてたし……

話を変えるが羊君は能力をうまく使えるようだが怒江ちゃんは上手く使いこなしてないんだよなぁ……
そういうことで羊君をどっかにやったんだけど怒江ちゃんまだブツブツ言ってるし……

「――――で私と羊君は幸せに暮らすの。　ってあれ？羊君は？羊君は何処なの？ダメじゃない私から3メートル以上離れたら。　私達は見えない赤い糸と言う名の鎖で繋がれてるの。　絶対に離れられない。それが私達なのにもう……照れてるのかしら、あっ！忘れてたわ。　早く結婚の約束をしないと……」

「待て待て待て待て！ストップストップスト～～～ップ！！」

この3歳児怖すぎるだろ……15歳の私が震えるレベル

「――――何ですか愛等さん。　まさか私の羊君に！」「ない！それは絶対にないから！！」「えっ？」

疲れるなぁこの子は……羊君はよく疲れないなあ

「君の能力『荒廃した腐花（ラフラフレシア）』をうまくコントロールできるように瞳に頼まれたんたんだ」

「どうしてですかぁ？」

「……言いたくないのだがこのままだと羊君を腐らせるぞ」

荒廃した腐花（ラフフレシア）は危険すぎるからな……

「えっ……羊君が……く……さる……」

目が！怒江ちゃんの目が怖い！人を殺す目だあれ！

「落ちつけ怒江ちゃん！　そのために私がコントロールできるようにすると言ってるんだ！　頼むから落ちついてくれ！」

大丈夫かな……　はぁ……

～1時間後～

「ご飯出来たよ～」

やっと……やっと出来た！チャーハン出来たよ！長かったよ！3歳児じゃねえだろとか言われてるけど実際3歳児だし、体は小さいし、知識も曖昧だし、大変だった……

「羊君が作ったの！？凄いわね羊君！！」

怒江ちゃんは喜んでいる。　頑張ったかいがあったよ……

「ああ、うん……ご飯かご飯……」

愛等さんはなんだか適当だった。　なんだよ！頑張ったのに！

「「いただきまーす！！」」

と俺と怒江ちゃん

「いただきます……」

と元気のない愛等さん

「おいしい！おいしいわ羊君！これは将来料理人になれるぐらいのレベルよ。　雑誌に紹介されてる料理店が雑草に見えるくらいに――――」

怒江ちゃんが褒めてくれた。　優しいな……

「おいしいもなく不味くもない至って曖昧な味だな。」

元気になった愛等さんが言った。　曖昧って……初めてなんだから仕方ないよね……

「（ギロッ）」

「おっ…おいしいぞ！凄く！」

愛等さんが震えてるけどなんでだろう？

まぁ、いいか

こうして愛等さん家の1日が終わった。

1話かもしれない（後書き）

3歳児だけど料理作れるってチートじゃね？

2話らしきもの（前書き）

愛等さんのキャラが…

2話らしきもの

「よし！修行だ羊君！修行するぞ！孫悟空だって修行してただろ！」

朝っぱらから何を言い出すんだこの人は……

ああ、こんにちは、羊です。

3歳でチャーハンを作ったあの羊です。

朝はカットで、特に何もなかったしね。

怒江ちゃんが俺のベットで寝てたり、愛等さんに『リア充が！！』って言われたり

特に何もなかったよ。

で、アニメ好きの愛等さんが壊れたと……

「二次元（アニメ）と現実（リアル）は違うんですよ？」

「そんな可愛そうな人を見る目で見るな！」

3歳児に現実見ろって言われるのは恥ずかしいだろなぁ……

「せっかく『強制終了（ラスボス）』と言われた私が鍛えてやると言ってるのに……」

「愛等さん……」

いたたたたた。　15歳と言うのは本当だったようだ。　ラスボスって……

まだ卒業できてないんだな……中二病……
『弱パンチ』とか技名言ってる時点で気付くべきだったなぁ……
いつか『絶対零度（エターナルフォースブリザード）』とか言うんだろうなぁ…

「やめて！お願いだから！そういうのには弱いんだ私は！」

愛等さんの弱点は目の訴えだそうです。　テストに出るから要チェック

「はぁ……で？『強制終了（ラスボス）（笑）』さんが何ですか？」

「（笑）って言うな！……とにかく君には力が足りん！」

「3歳児に何を求めているんですか……」

3歳児で力が足りてたら吃驚だよ……孫悟空みたいになるのかな？

「とととと兎に角！修行だ修行！特訓だ！来い！！」

もう意味わかんない……

「はぁ……じゃあ、ちょっと実験で『俺が愛等勇気の家の台所にいるかもしれない』」

と俺が言うと俺は愛等さんの家の台所に居た。

おお！成功した！『成功確率大体５０パーセント』なんだよなぁ……　２回に１回成功できるんだけど……もう『俺が愛等勇気の家の台所にいるかもしれない』というのは使えなくなるんだよなぁ……

確定したことは不明確にできないんだよ。

まぁ、料理の練習しとこ「羊くーーーーん！！」見つかった……

「なんなんだそれ！私の能力より反則だぞ！！」

ん？愛等さんって唯のパワー馬鹿とかじゃなかったの？

「『絶対の炎（エターナル ファイヤー）』とかそんな感じですか？」

氷か炎辺りかな？　いや、もういっその事『永遠の闇（エターナル ダークネス）』かな？

「人をそんなキャラにするな！私の能力は『茶番劇（ファイナルステージ）』だ！！」

いや、そんなどうだ！みたいな顔されても……まださっきのよりはマシだよなぁ……

「かっ…かっこいいですよ？」

「なぜ疑問形何だ…まぁいいか、修行だ修行！」

愛等さんのニックネームが修行馬鹿になった。

たぶん3話かな？（前書き）

苦党ってほかにいないかな？

たぶん3話かな？

皆さん、こんにちは、羊です。
苦い食べ物が好きなあの羊です。
ピーマン生で齧ってたら愛等さんにキモッ！って言われました。

　そんなことより前回までのあらすじ

愛等さんは若かった。　そして中二病感染者だった以上

「……どうしてこうなった」

今、なぜか愛等さんと構え合っています。
そして怒江ちゃんが向こうからキラキラした目でこっちを見てるんだけど……

「来い！羊君！」

簡潔に言うとあの後、愛等さんに捕まった以上

「はぁ……」

あれ、成功するかな……

「『愛等勇気に勝つかもしれない』」

成功確率５０パーセント！曖昧だけどね……

【……】

なにも起こらない。　失敗したか？

「いや……それ私に攻撃しないと意味ないんじゃないか？」

「あっ……」

戦わないと勝てないよね。　はぁ……ミスった……

「……てい」

俺は下に落ちている小石を投げた。

これが愛等さんに当たれば成功か分かるんだけど……

「私の能力がどんなのか言ってなかったな。『茶番劇（ファイナルズステージ）』、全て決まっちゃうんだ。」

「決まる？」

「そう決まったことなんだ。　そう、ヒーローが悪い奴らを倒すのも『決まりごと』。最後にはヒーローが勝つんだ。　ありきたりなアニメならそうだろ？　だから私が勝つのも『決まり』なんだ。」

小石が愛等さんに当たったのだが何も起こらなかった。

ちょっと待て！それ酷くないか！？愛等さんが勝つことが決まりごとならどうやって勝てばいいんだ？

俺の能力全部意味ないじゃないか！

「勝てるわけありませんよ！どこの主人公ですか！」

「いや、私は主人公にはなれないよ……だから『強制終了(ラスボス)』なんだ」

どちらかと言うと裏のボスだな。　絶対に

「……やばい」

何にも対抗できないじゃないか。　最後に一発決めることもできない。

「だから私は主人公を探しているんだ。　私を倒してくれる主人公を、羊君。　君が主人公かもしれない。　だから私は闘うんだ。主人公を探して。　君は勝ちも負けも『曖昧』にして終わらせる。私は勝手に勝者を『決めて』終わらせる。　私達は案外似ているかもしれないね。だけど……くらえ！『弱パンチ』！！」

「俺は四天王の一番目ぐらいがいいなぁ……」

それが俺の最後の言葉だった。

死んでないよ？たぶん……

「…あれ？ここは…」

気がついたらベットにいた…俺はすぐ右を見た

「…ｚｚｚ」

怒江ちゃんが寝ていた…やっぱり！朝と同じ…えっ？

……怒江ちゃんは裸だった。

裸だった!?　ちょっと待て!　なんでだ!?

「ちょ……!?怒江ちゃん!?なんで裸で俺のベットにいるの!?」

「……うにゅ〜」

うにゅ〜ってかわいいけど早く起きて!!　これを誰かが見たら……「おーい!羊くーん!」愛等さん…

「心配して来…ああ、お楽しみ中でしたか…失礼します…」

中二病(あいとうさん)が敬語使うだと……!?いや、勘違いしないで!帰んないで!

「…3歳児に負けた3歳児に負けた3歳児に負けた3歳児に負けた3歳――――」

愛等さんがブツブツ言いながら帰って行った。　愛等さん!絶対勘違いしてるよ!

愛等さんに出会いがあることを祈っておこう……

「それより怒江ちゃん!起きて!お願いだから!」

「……ん〜?何?羊君〜」

「何?じゃないって!　なんで俺のベットでしかも裸で寝てるんだよ!?」

「ん?夫婦が一緒に寝るのは普通じゃない」

「夫婦！？」

いつから夫婦になったんだよ！

「そう夫婦よ夫婦、忘れたの？　私達が出会った時からそうだったでしょう？　たぶん私達の前世も前前世も前前前世も夫婦だったのよ。　偶然ではなく必然、そう必然なのよ。　私が羊君に出会ったのも必然。　私と羊君がお互い一目惚れしたのも必然。　そして私と羊君が夫婦になるのも必然なのよ。必然……そして運命、全ては神様が決めた運命なの。　今から婚約届けを出しに行きましょう！　ああでも3歳じゃ結婚できないんだっけ……じゃあ今から結婚の約束しましょう！」

「…」

俺は唖然としていた。

女の子ってこんな感じなのかな？いや…愛等さんは……中二病しかイメージないなぁ、後、反則……3年しか生きてないわけだし……女の子と言うものはこういうものじゃないのか？

しかも俺、今告白されてる！？……3歳で告白されるとはいや、婚約か……

怒江ちゃんは優しいけど3歳で結婚の約束か～、普通しないよね？

今のところ家族としてしか見れないし……いっそのこと『曖昧』に……

いやいやいや！駄目だ！それが俺の悪い癖だ！曖昧にしたら駄目だ駄目！

愛等さんにも「何回も曖昧にするのはやめろ『曖昧屋』って呼ぶ

ぞ」って言われたし……

「どうしたの羊君？照れてるの？まぁ、このまま夫婦の営――」

「ストップ！！」「どうして？」

これ以上言うと色々とやばい気がしたんだ……

「おっ……大きくなってからにしてよ！そういうのは！」

こういうのは大きくなってから考えたいんだ。　三歳児の俺にはこんなことしか考えれないけど二十歳の俺は何とかしてくれるだろう。　憶測だけど

「もう！羊君たら恥ずかしがり屋さんなんだから……１京２８５８兆０５１９億６７６３万３８６５歩譲って待ってあげる！」

うふふっと笑いながら怒江ちゃんが言った。

譲り過ぎじゃないか？後、その数字何か違和感が……

「大人と言う事は２０ぐらいかしら？後１７年も待たなければいけないのね……いや、ポジティブ、ポジティブに考えるのよ。　そう、後１７年たてば結婚してくれると羊君が言ってくれたのよ。　そう！きっとそうだわ！――」

俺は選択肢を間違えたかもしれない……

4話じゃないかな？たぶん…（前書き）

感想待ってます

4話じゃないかな？たぶん…

「わぁ……」

朝起きたら庭が花で埋め尽くされていた。

こんにちは、花では紫陽花が好きな羊です。

愛等さんに「この（自主規制）が！！」と罵られたあの羊です。

あの人は3歳児に何言ってんだろう……

笑顔で瞳さんに通報（チクリ）ました　。

泣いて喜んでいました。

いいことをした後は気持ちがいいなあ……そんなことよりこれは何なんだろう……

また愛等さんの仕業か？

と思っていると……

「これは努江ちゃんのトレーニングだぞ」

いつの間に愛等さんが背後にいた。

何どや顔で背後に立ってんだよ……

「トレーニング？」

「ああ、トレーニングだ。　そこに怒江ちゃんがいるだろ」

ほらっと言いながら愛等さんは庭を指差した。

「ん？怒江ちゃん何やってるんですか？」

庭に居た怒江ちゃんは土に手を突っ込んでいた。　凄いシュールだ。

「『荒廃した腐花（ラフラフレシア）』のコントロールするトレーニングだ」

触れたものを腐らせる能力だったけ？　だけど土を腐らせてどうするんだろう……

「土を腐らせたら腐葉土になるだろ？腐葉土を操るのは植物を操るのと同じなんだ。」

へ～、よくそんなこと思いつくなぁ……愛等さん頭いいな～

「なんかそんな電波が飛んできたんだ。」

褒めた途端これだよ！　この中二野郎！

「じゃあ、あの大量の花は……」

「ああ、全部怒江ちゃんが頑張ったんだぞ」

こんな花畑ができるまで頑張るなんて凄いなぁ……

「はぁ……はぁ……」

怒江ちゃんは酷く疲れているようだ、ちょっと休ませないと……

「大丈夫怒江ちゃん？休まないと……」

「いや、まだ続けるわ。　完璧に扱えるまで何時間も何年も何十年も何百年も練習しないと、羊君が腐ってしまうのそんなの嫌よ。そうなったら私が死ぬのと同じじゃない。　嫌よ、そんなのありえない！」

……やってみるか運任せ、頑張ってくれよ俺の曖昧、曖昧だけど確実に頑張ってくれ。　不確定だけど

「俺は腐らないかもしれないよ？『俺は江迎怒江によって腐ることがないかもしれない』」

俺はそう言いながら怒江ちゃんの手を握った。
これが失敗したらやばいなぁ……失敗したら俺が腐っちゃうし、この能力は無理やり確定させる能力だからな～

「……何も起こらない、成功だ！」

「……もう羊君は腐らないの？私は羊君の触れてもいいの？」

「うん、もう俺が腐ることはない。言い切れるよ。」

不確定を確定したんだ。　もう不確定になることは無いよ。　言い切り

「……いいの？本当に腐らないの？　本当の本当に腐らないの？本当の本当の本当に腐らないの？　本当の本当の本当の本当に腐らないの？」

「『腐らない、絶対に腐らないよ』」

俺は怒江ちゃんの手を強く握った。

「……ううっ……うわあああん！！！！」

怒江ちゃんが俺に泣きながら抱きついた。　やっぱり苦しかったんだね……　はっぴーえんどじゃないか。　気分がいいね。

「これが青春か……リア充が……」

愛等さん、やはり空気を読んで発言してください。　殴りますよ？

今日もこんな感じで一日が終わった　。　しりあす

5話なのかな？（前書き）

羊君のキャラわかんない！　いぇーい…

5話なのかな？

あの出来事から2年がたった……えっ？　飛ばしすぎ？　いや～だってあれから何もなかったよ？　次の日から怒江ちゃんと一緒に寝るようになっただけだよ？　後、なぜか愛等さんまで入ってきて瞳さんに連絡したぐらいだよ？

そんなことより……

「よし！幼稚園だ！君たちは幼稚園に行くんだ！わかったな？」

なんで朝っぱらからテンションが高いのだろうかこの人は、いい加減キャラがうざい。

しかもまだ朝の5時なのに起こしやがって……

つか愛等さん関係ないのになんでテンション高いんだよ……

愛等さんのうざさは2年たっても慣れないものだと思った。

こんにちはの人はこんにちは、一応主人公の羊です。

怒江ちゃんに結婚の約束を申し込まれたあの羊です。

怒江ちゃんの背中から出てる黒いオーラが年々増しているのは気のせいなのだろうか……気のせいです気のせいです。　何にも見えない見えない。

「……うにゅ～」

無理やり起こされた怒江ちゃんはまだ眠たいようだ。　可愛い

「はっはっはっ！！」

相変わらず愛等さんは無駄にハイテンションだった。　うざい

～幼稚園～

「着いたぞ！」

うるせえなこの人……そろそろイライラしてきた……なんで5時に起こしといて9時までテレビ見るんだ！　朝の子供劇場を真剣に見んな！

そのせいで遅刻じゃねえか！この野郎！

「「……」」

「なんだ～元気がないぞ～君たち！」

たぶん今怒江ちゃんと思っていることは同じだろう……ぶん殴りたい、うざい、帰りたい、かな？

「ほらほら！行くぞ！」

熱血系な愛等さんが俺たちの首根っこを掴んで無理やり連れて行った。　幼児ぎゃくた～い！

「今日から皆の新しい仲間になる二人……羊君と怒江ちゃんでーす！！」

幼稚園の先生にハイテンションで自己紹介を振られたときはどうすればいいんだろう……帰ればいいのかな？　冗談だけど

「今日からメロン組でお世話になります。　帰山羊です。　よろしくお願いします！」

俺が自己紹介すると皆が静まり返った……えっ？　別におかしくないよね？

※5歳の子がこんなに礼儀正しいのに皆驚いているだけなのに羊は気づいていない。

「今日からメロン組でお世話になります。　江迎怒江です。　よろしくお願いします。　後、羊君は私と婚約しているので女子は羊君に近づかないでください。　ああ、でもそうなると羊君と会話も無いまま残念な人生を送ってしまうのだから少しぐらいなら許すわ。　二秒間ね。　でも羊君から見れば私以外の女なんて道端に落ちている石ころにしか見えないのだけれど、でも話せるだけ感謝しなさい。　後、男子は羊君に触れないで頂戴、理由？そんなの羊君に穢れた手で触れるなんて地獄の業火で焼かれるぐらいの罪なのよ。なので男子は羊君に触れないように、と言うか3メートル以内に入らないように、もし約束を破るなんて馬鹿な行為をしたら、孫の代まで何もかも腐らせるわよ。　何もかもね、わかった？」

怒江ちゃんが言った途端メロン組の園児たちが泣き始めた。　先生はずっと気持ち悪がって部屋の隅で頭を抱えている、流石にこれはインパクト有り過ぎたかな？　怒江ちゃんらしくて可愛い自己紹介だと思ったんだけどな～

「どうしたのだ！！」

園児の鳴き声で駈け付けたのかアホ毛が印象的なおかっぱの女の子が入ってきた。

「どうしたって唯自己紹介しただけだよ？」

まあ、本当に自己紹介しただけだし嘘は言ってないよね？

「嘘つけ！じゃあ何で先生まで震えているんだ！」

「怒江ちゃんの目が怖かったからかなぁ……」

俺の餌に触れるな！みたいなライオンの目だったし

「ふむ……まぁ、そういう事にしといてやろう」

凄い上から目線だなぁ、この子……

「私は黒神めだかと言う者だ、貴様は？」

何かに似てるなぁ……と思ったけどそうか愛等さんに似てるのか

面倒くさいのが二人になったなぁ……と言う呟きは園児達の泣き声

で掻き消された。　曖昧

5話なのかな？（後書き）

羊君がどんどんマイナスになっていくー

6話だったかも（前書き）

はい、短いっすね…
すみません…

感想待ってます

6話だったかも

「私の家に遊びに来ないか？」

アホ毛がそんなこと言った。　面倒だな。　曖昧に

こんにちはございます。　苦党仲間が欲しいです。　羊です。

自己紹介で怒江ちゃんと共に失敗したあの羊です。　練習でもしておこうかな？

あの自己紹介の後、園児達にトラウマを植えつけたようです。

メロン組の皆が近づいてこなくなったからなぁ……

先生まで怯えるし……

「イチゴ組の人吉善吉だよ～」

「私もイチゴ組だぞ」

一応、友達も二人できました、普通の男の子と異常な女の子の二人です。

男の子はその辺の幼稚園児と変わりませんが、女の子はその辺の幼稚園児と全然違いました。

メロン組に飛び込んできた時も扉ぶっ壊して入ってきたからな……

三日後……

「私の家に遊びに来ないか？」

冒頭に戻る。　戻りますよ。　嘘じゃないです。　曖昧です。

「めだかちゃん家？」

えげつないほどお金持ちって聞いてたから豪邸かもな～、豪邸だよな……　愛等さんに言ったら一緒に行きそうだな……目に見えるようだ。

「愛等さんも呼んでもいいですかぁ？」

怒江ちゃんは人を思いやれるいい子です。　絶対

「あっ……ああ！いいぞ！」

めだかちゃんは怒江ちゃんが苦手らしい。　と言うより、俺と愛等さん以外は皆、怒江ちゃんが苦手なようだ。　何か距離を置いてるような……何故だろう？　子供の俺にはわかんない！

「うん！いいね！遊ぼ遊ぼ！」

善吉くんは別だな……将来人を思いやれるいい人になると俺は思う。　曖昧だから説得力ないね。

「ん？　いや、私は仕事があるからいいよ。」

「「なっ……なんだってー！？」」

もう吃驚(びっくり)した。　生まれてから一番吃驚(びっくり)した。　だってあの愛等さんだぞ！『今日は家でだらだらする日だ！』って2年間言い続けたあの愛等さんだぞ！『仕事？…羊君、人間は生きているだけで大変な仕事なんだよ…』とドヤ顔で言ったあの愛等さんだぞ！地球が逆回転したってニュースより驚きだよ！

「そんな驚くなよ…まるでいつも働いてない私が働いたみたい反応じゃないか……」

「「……」」

「あんまりだー！！」

うわーんと言いながら愛等さんは出て行った。　だってねぇ……駄目人間のレッテル貼られてるしねえ、仕方ないよね！　愛等さんだし！

「……行こうか怒江ちゃん。　俺達は何も見てないよ。」

「……うん」

後で愛等さんに謝っておこう……曖昧に

ピンポーン♪

と古典的なチャイムの音がした。

ん？めだかちゃんかな？　めだかちゃん以外だったら空気読んでほしいものです。

「おい！迎えに来たぞ！」

めだかちゃんだった。　めだかちゃんなのはよかったけど後ろのヘリコプターはなんだい？　怒江ちゃんの花畑が飛ばされそうだからやめてほしいんだけど……

改めて金持ちの凄さを知った俺だった……金持ち怖い。

7話だよ！たぶんそうだよ！（前書き）

短い…

7話だよ！たぶんそうだよ！

「でけえ……」

一般市民がこれを見ると必ず言うだろうと思う一言を言った。わかりにくいね。

こんにちは、気分は朝だけどこんにちは、羊です。

最近実は自分は普通の5歳児じゃね？って思ったけどやっぱり異常だったあの羊です。

周りが個性豊かな人のオンパレードだから自分が普通に見えてきたなぁ……

でも、こんな考えを持った幼稚園児っていないよね。

さて、冒頭の台詞（セリフ）ですが、めだかちゃんの家に着きました。ヘリコプターで……

しかも思ってたのと10倍違うんだよなぁ……

「さぁ、入ってくれ」

めだかちゃんが言った。メイドと執事が大量にいるんだけど……

「人がいっぱいいるね～」

善吉君はやっぱり普通の幼稚園児だな。子供っぽいし、これ、同年代の子の思うことじゃないよね……

「おーい！早くー」

めだかちゃんがいつの間にか向こうにいた。　テンション高いと愛等さんに似てるなぁ……

「待って～」

善吉君が走ってめだかちゃんのところに向かう。　うん、善吉君はマスコット的存在だな。　とか思ってたら怒江ちゃんからどす黒いオーラが……

「……羊君、人間なんだからいろんな趣味があるのは当たり前よ。　だから最初の事が好きではない事は承知の上だけどさすがに男に走るとは夢にも思わなかったわ。　その辺の女の子の方がまだましよ。　これはもう羊君に手をつけろ！　睡眠薬を使えば問題ないとでも神様が言ってるのかしらね。　そうね、そのようね。さあ、羊君、その豪邸の寝室に行きましょう。　大丈夫、何もしないわよ。　ふふふ……」

「俺はノーマルだ！」

変態（アブノーマル）じゃないぞ！後、怒江ちゃん怖い！　目がやばい！

「遅いぞ～羊に怒江～早くしろ～」

愛等さんに完全にそっくりになってきているめだかちゃんがだるそうに言った。

「ごめん！……ほら行くよ怒江ちゃん！」

「……！？」

俺は怒江ちゃんの手を掴んでめだかちゃん達の方へ走っていった。
ん？なんで怒江ちゃんの顔が赤いんだろう？

「広っ！！」

もう家……いや、屋敷内は思い通り広かった。
なんでドアが所々にあるんだろう……迷路みたいになってるし
これ宮殿って言ったほうがいいな

「広いなめだ……」

かちゃんと言おうとして振り向いたらそこには誰もいなかった……
誰もいなかった！？　ちょっとやばくないか！

……

途中からの人はこんばんわ。　気分はこんにちは羊です。
今、現在進行形で迷子中です。　めだかちゃんの家で……
本当どうしよう……

ん？右側の扉からどす黒いオーラが、これって怒江ちゃんのオーラかも！
よし！この部屋だ！オーラを信じて…ってい！

俺は扉を開けた。

「暗っ！」

その部屋は周りと比べて真っ暗だった。　暗くてよく見えないな……

ん～目が慣れてきた……うおっ！なんじゃこりゃ！

辺りは本、本、本と本が大量にあった。　ここは図書室なのかなぁ……

あれ？向こうに誰かいるぞ。

「……」

女の子がずっと何かを書いている。　すごい集中力だなぁ……

この人にちょっと道を教えてもらおうかな。

「すみませーん」

「……」

「すみませーん！！」

「……ん？誰だお前？」

やっと気づいたか、さて、道でも聞こうかな？

「すみません。　道を教えて欲しいんですけど……」

「妹の友達か？……にしては礼儀正しいな」

やっぱり俺は普通じゃないのかな？　いや、俺はノーマルだ！

「……妹って事はめだかちゃんのお姉さんですか？」

「ああ、そうだ。　俺はくじらって言うんだ。」

めだかにくじら……お姉さんの方が強そうだな。　くじらだし。

大きさ的に考えて。

「ではくじらさん、道を聞く前にちょっと質問してもいいですか？」

「なんだ？」

「何書いてるんですか？」

「ん？コレの事か？ほら」

さっきくじらさんが書いて紙を見せてもらった。

おお！すげえ！

その紙には数式で埋め尽くされていた。　５歳児の俺にはわかんないよ……

でもくじらさんって頭良いんだな～

「凄いですね！」

「凄くねえよ……俺はこんな恵まれた才能なんかいらねぇ！」

くじらさんは数式の書いてあった紙を引きちぎった。　ぬお！

何で！

「俺はこんな恵まれた環境は嫌だ！恵まれた環境なんてクソ喰らえだ！」

くじらさんは椅子を本棚に投げつけた、正直な話、５歳児の俺に言われてもなぁ……

まぁ、仕方ないな。

「幸福が嫌なんですか？」

「ああ！」

「だったら『曖昧』にしてあげましょうか？あなたの幸福を。」

「『曖昧』？」

「そう『曖昧』、その代わりもう一生あなたは幸福になれませんけどね。」

「できるのかそんな事！」

「……嘘です、そんな非科学的な事できわけありませんよ。唯の子供の戯言ですよ。」

ちょっと考えたけどやっぱ駄目だよね。　他人の人生に手を突っ込んじゃうのは愛等さんに怒られそうだし。

「……はあ？嘘かよ。　ちょっと信じた俺が馬鹿だったぜ！」

「あはは、ごめんなさい。　早く道教えてもらえなかったからイライラしてたんですよ。」

「ああ、道な、ここを出てまっすぐ行くとたぶん妹達がいるぜ。昨日、『私の部屋に友達を呼ぶんだ！』ってうるさかったし」

「ありがとうございます！後、嘘吐いてすみません！では！」

俺はお礼を言って部屋から出た。

怒江ちゃん怒ってるかも……

カンと言うものはよく当たるからなあ。

……

「まったく、なんなんだアイツは……」

変わった奴だったな……

「……ってあれ？椅子壊れてなかったか？」

確か俺が椅子を本棚にぶつけて壊れた筈じゃ……

【後、嘘吐いてすみません！】

そういうことか……

「『曖昧』か……」

アイツなんて名前なんだろ？

…………

「羊君、どこに行ってたの？心配したんだから、もう、私から３メートル以内から離れたら駄目ってあれほど言ったのに、１メートル以内に変えようか？いっその事もうずっとくっついたままとかの方がいいかしら？うん、それがいいわね。　そうしましょう。　そういう訳で羊君、離れたら駄目よ。　わかった？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

もう怖いってレベルじゃなかった。　やばかった。　泣きそうだった。　おしまい。

で終わりたかった……

めだかちゃんと善吉君が抱き合って震えている、トラウマ植えつけたんじゃないかな……

「後、羊君……『なんで別の女の匂いがするの？』」

もう俺死ぬんじゃないか？　死ぬねバイバイ。

包丁を持った怒江ちゃんに追いかけられたのは言うまでもない。

8話だったかな？たぶん違うかもしれない（前書き）

短いと何回言えば（ｒｙ

8話だったかな？たぶん違うかもしれない

「羊君？どうして私から離れたりしたの？馬鹿なの？死ぬの？いや…死ぬのは駄目よ、死んだら私も一緒に死ぬからね喜んで、死ぬときは私も一緒よ、だから私が死ぬときは羊君も一緒に死んでね、できれば一緒に身を投げるがいいな、崖から二人が抱き合った状態で飛び降りるの、そして羊君は私の耳の元で『永遠に愛してる』と呟くの、嗚呼、いいわ、心中も立派な愛の形よ、それも綺麗過ぎるね、まるで雪の結晶のようだわ、ああ、話が脱線したわね、それで本題は…誰と会ったの？フルネームで答えて、ははっ、答えても何もしないわ、羊君にはね、その女はまず、私の許可無しに羊君に会ったことを３０時間問い詰めるわ、次に…えっ？まだあるの？…ってあるに決まってるわよ、後、１４８５個あるわよ、うーん…やっぱり少ないかしらね…１９８２４個も減らしたから少ないに決まってるわね、私も腐っても人間なのね…でも流石に少なすぎるから１８７６個にしようかしら、うん、十分ね、後、大体誰が羊君に近づいたかはわかっているわ、めだかちゃんの家の誰かって所までわかってるんだけど、まずめだかちゃんは私と一緒にいたから違うわね、めだかちゃんには確かお兄さんしかいなかったわね、と言うことはメイド？メイドなのね、だって他には女の人なんていなかったでしょう？つまりメイドが犯人ね！まさかメイドが犯人だったとは予想外だわ、そのメイド…ショタコンなのかしら…それより、メイドが犯人と決め付けたのは良いけど多すぎるわね、多すぎる…どうしよう、一人一人捕まえて拷問でもしようかな…あっ！そうだわ！羊君に直接聞けばいいのよ、それが一番だわ、さぁ、羊君、誰と出会ったか教えて頂戴？」

「ひっ…羊君！とにかく謝ってあげて！」

愛等さんが凄くびびっていた
だけど俺は何故かわからないが怒江ちゃんを見ると胸が締め付けられた

こんにちは、好きな食べ物はピーマンとゴーヤ、羊です

そうです、礼儀正しい事に定評があるあの羊です、これを修羅場と言うのでしょうか
それより俺も何かおかしくなってきたな…怒江ちゃんを見ると顔が熱くなるんだ…
愛等さんに言ったら『瞳！早く来てくれ！羊君が重症だ！』とか言いそうだし

「羊君！地面に額をつけるだけでいいから！」

愛等さん…それ土下座じゃないですか
何かもうどんどん酷くなるな、愛等さん…

「何か言ったらどうなの？羊君、もしかして私以外に好きな人がいるの！？そっ…そんな！酷い！私というものがありながら！そんな…」

「うーん…」

「何？羊君、自白するの？」

「何かこの頃、怒江ちゃんを見ると胸が締め付けられるように痛いんだけど…なんでだろう？」

「（どどどどどど鈍感だーーー！！こいつ知識はあるのに鈍感だーーー！！）」

愛等さんが凄い顔してこっち見るんだけど…何かあの顔イラつくな

「こっ…これはここここ告白なの！？めめめめ面と向かい合って言われるとは思わなかったわ！という事は…」

怒江ちゃんがまた暴走してしまった…愛等さんはこっち見て『リア充が…』とか言ってくるし…

まぁ、今日もたぶん平和です、おしまい

9話だと思えば9話だけどそうじゃないとも言えるかもしれない（前書き）

また2年後になってしまった…

9話だと思えば9話だけどそうじゃないとも言えるかもしれない

「今日から君達は小学生だ！幼稚園のように楽ではないぞ！」

あなたは男塾にでも行ってきてください愛等さん、女だけど…

こんにちは、料理のレパートリーが増えました、羊です

もうネタが無くてどうしようか悩んでいるあの羊です

あれから2年が経ちました、デジャブ？気のせいじゃないかな？

ちなみにあれから何もなかったよ、これもデジャブ？気のせいだよ

アハハハハ…はぁ…

次の日から朝起きたら怒江ちゃんがいたり、トイレに行ったら怒江ちゃんがついて来たり

お風呂に入ったら怒江ちゃんが裸で入ってきたり、寝るときもわくわくした怒江ちゃんが布団にいたり…

とそれを2年間繰り返しただけだよ？本当だよ？まあ、くじらさんが家出したのが一番ビックリしたかな…

俺、実は異常じゃないんだ…って言ったら絶対に『ああーそうだねー（棒読み）』とか言われるよ…

そろそろキャラ作りしないと主人公が愛等さんになるよ…アイマイ物語がおまけになりそうで怖い、次回から茶番劇場！！とかタイトルになってそうでマジ怖い…

「どうした羊君！元気がないな！そういう時は…でーん☆お米！」

なるほど！コイツが俺のキャラを薄くしていくのか！

「羊君、元気が無いの？そういう時は私に任せて！能力をうまく扱えるようになった私は味噌を作ることが出来るの！じゃあ、今から部屋が埋まるくらい味噌を作ってくるわね、全部羊君が食べるのよ、半分ぐらいは味噌を食べてね、半分は味噌汁にするから☆」

わかった！二人して俺のキャラを消していくんだ！はぁ…

誰か俺と変わって欲しいと思った入学式の日の事だった

……

「――――以上で入学式を終わります」

終わった～いや～長いな～校長先生の話って、新入生が皆疲れてるぞー、一部を除いてだけど…

めだかちゃんはキラキラした目で校長先生見てるし、善吉君はワクワクしてるし、怒江ちゃんはずっとこっち見てるし…

そういえば怒江ちゃんのことをヤンデレって言うんだね、ヤンデレって何の略なんだろう…

ヤンキーデレデレ…違うな…怒江ちゃんはこう、お嬢様みたいな感じだし

まぁ、学校終わってから愛等さんに聞くかな

「羊君ー、教室に戻れだってー」

と怒江ちゃんに言われた…はっ！そうだ自己紹介！怒江ちゃんに言

っておかないと！

「怒江ちゃん…教室戻ったら自己紹介あるよね？」

確か教室に集まった時に言ってたよな…

「そう！他の女が羊君に関わらないように言っておくの！」

「うーん…幼稚園のときは事件にまでなっちゃったから今回はちょっと自重してくれない？」

あれから園児たちが怒江ちゃんを見たら泣き始めたからなぁ…

トラウマになったな、絶対に

「…わかった、羊君が言うのなら」

よし！これで大丈夫だろう…そう思った俺がいました

……

「江迎怒江です、私が言いたいことは一つ…いや二つ…とにかくたくさんあります、まず羊君には近づかないでください、特に女子、羊君は私の物なので1メートルぐらい離れてください、そうじゃないと奈落の底に突き落とします、可愛く言うとぐちゃ☆ってします、男子も近づかないでくださいよ、汚い物を羊君に近づけたくないので、そうじゃないとパーン☆ってします、まだまだ理由がありますが長くなりそうなのでこの辺で終わります」

これなんてデジャブ？

怒江ちゃんなりに自重したのはわかるんだけどぐちゃ☆とかパーン☆とか…
でもクラスメイト全員泣いてるんだよ、めだかちゃんと善吉君がいないから全員初対面だしね…
先生も震えてる…

「つっ…次はかっ…帰山羊くん！」

そうか…次は俺だった…

「帰山羊です、よろしくお願いします…ははっ…」

苦笑いしか出来ない…皆泣いてるし、先生も泣きそうだ…

「あのー先生ぇちょっとイイですかぁ？」

と怒江ちゃんがもう色々とやばい状態の先生に質問した

「ななななな何ですか！？」

「どうして私が羊君の隣じゃないんですかぁ？」

やめたげて！もう先生がやばいことに！

「もう…どうでもいいです…勝手にしてください…ううっ…」

うわーん！！と先生が泣いてしまった…これを学級崩壊と言うのか…

「よかった～これで羊君の隣に座れるわね、よかったよかった♪」

誰かこの状況を打破してください…

一日目から心配な小学校生活だった

たぶん１０話（前書き）

きゅーてんかい

たぶん１０話

「学校だぞ！起きろ羊君！手遅れになるぞ！」

この人は何と戦ってるんだよ…

おはようからおやすみまで羊です

初っ端からやってしまったあの羊です

あれから怒江ちゃんの顔見ると泣き出すんだよ、同じクラスの生徒や先生が…

俺を見るとごめんなさい！って謝り始めるし…

結局、俺と怒江ちゃんの二人だけ別の教室で授業することになった

「これは？」

「あ！」

「…」

これはなんて拷問？

今、あいうえお表を使って平仮名の勉強中です、俺…愛等さんが「これ全部合ってたら一万円やるぞ」って大学入試の問題集を渡されてやったら半分合ってたんだよ？…半分だけど…

今の気持ちはコナン君だよ…素直に答える怒江ちゃんが可愛いです

「これは？」

「い！」

「…」

早く終わらないかな…

……

「――――――以上で授業を終わります」

「…起立ー礼ー」

「「ありがとうございました！」」

終わった～やっと終わった～

「羊君って頭良いんだね～私にも勉強教えてよ！」

とキラキラした目の怒江ちゃんが言った

「うん！いいよ」

小学生の問題なら楽勝だぜ！…だぜって似合わないなぁ…

「…あっ！今日友達が出来たんだよ！」

「おお！！」

怒江ちゃんの友達か～どんな子だろ？

「で、友達が今日二人だけで遊ぼうって言われたんだ～♪ゴメンだけど羊君、今日は先に帰ってて」

「ＯＫ！」

怒江ちゃんも小学生っぽいなぁ～

こんなことを思う俺はおっさんなのだろうか…

はぁ…帰ろう…

歳はとりたくないなぁと呟きながら一人で帰った

……

「怒江ちゃん遅いなぁ…」

時刻は６時半、俺と怒江ちゃんの門限は５時、遅過ぎる…怒江ちゃんは門限までには帰るって言ってたし…

これは何かあったんじゃないか？

愛等さんはいないし…

俺が判断しないと…

「…過保護に行こうか『俺は江迎怒江の目の前にいるかも知れない』」

……

俺は知らない場所にいた、どうやら成功したようだ

「大丈…」

怒江ちゃんが無事かどうかを確認しようと後ろを向いた

俺は言葉を失った

怒江ちゃんはボロボロだった

体中に殴られた跡や擦り傷がある

「ひ…つじ…くん…」

ボロボロの怒江ちゃんが俺に聞こえるか聞こえないかくらいの声で呟いた

「もう大丈夫だよ『江迎怒江の傷はなかったかも知れない』」

と俺が言うと怒江ちゃんの傷が無くなった

こういう時は能力も空気を読んでくれるのかと思いながら怒江ちゃんの頭を撫ででた

「だ…誰だお前！！何処から入ってきた！！」

とオッサンが空気を読まずに話しかけやがった

「…お前は？」

「俺はその餓鬼に泣かされた娘の父親だ！」

「…」

大体理解した、つまりこの糞野郎は娘が泣かされたの理由に娘をわざわざ怒江の友達にして家に誘い、それから怒江ちゃんに暴行を…

「……まいにしてやる」

「はっ？」

「曖昧にしてやる…」

「何言ってんだこの餓鬼！」

「《お前はみんなには見えるけど見えない》＜自分の事もずっとあやふや＞〔死ぬまで曖昧な人生を送るんだよ〕」

曖昧であやふやで不確定、死ぬより辛いよ

「なっ…何を言って…」

コイツはずっと曖昧に生きてあやふやに死ぬんだ、娘にも曖昧にしか覚えられないしね

「帰るよ怒江ちゃん、愛等さんも帰ってると思うし…『俺と江迎怒江は愛等勇気の前にいるかも知れない』」

と俺が言うといつもの家にいた…愛等さんに技名でも付けてもらおうかな…怒江ちゃんの技名も愛等さんが考えたし…
つか、今回成功率高いな…

「君たち…どこに行ってたんだ？」

愛等さんが般若のような顔でこっちを見た、いや…ラスボスだし魔王かな

「実は…かくかくしかじかで」

かくかくしかじかて便利だよね！

「何言ってるんだ？ちゃんと理由を言え！」

なっ…なんだと！？小説ならではの裏技が使えないだと！？
結局全部説明しました☆

……

「ふむ…そういう事だったのか…」

愛等さんに禁止されてたからなぁ…怒られるよなぁ…

「まぁ、遅れても仕方ないな、うん…」

「…えっ？怒らないんですか？」

てっきり、『この馬鹿羊が！！『弱パンチ』！！』とかすると思っ

たけど…

「するわけないだろうまったく…私は強制終了(ラスボス)だぞ…むしろもっとやれ！とか言うかな」

おい！本当にこの人はもう…不良にでもならせる気なのか？

「むしろ怒って欲しいのか？」

「結構です」

お辞儀の角度は４５度、完璧なお辞儀だった

「まぁ、それを怒るほうが馬鹿だと思うぞ？そんなかっこいいことしてな～、後、怒江ちゃん寝てるし…」

「えっ？」

怒江ちゃんの方を見ると立ったまま寝ていた…器用だなぁ…

「てなわけで怒らないから晩御飯作ってくれ！」

どや顔で言うな、どや顔で…

「まだ食べてなかったんですか？」

今、８時です、すぐに戦闘終わったみたいになってるけど結構長かったんだよ？つか戦闘してないしね、一方的だしね…ちなみに愛等さん５時に晩御飯食べます

「私はカップ麺も作れんぞ！」

決め顔で言うなよ…

結局、ラーメンを作らされました☆

今日は忙しい一日だったなぁ…

１１話だったっけ？久しぶりだから忘れたかも知れない（前書き）

お久しぶりです。　そしてすみません。

猫の小説が…ちょっと詰まってしまった…

久しぶりだから短いです。言い訳ですね、ごめんなさい

11話だったっけ？久しぶりだから忘れたかも知れない

こんにちは皆さん、そしてお久しぶりです。　えげつないほどお久しぶりです。　小説の書き方が変わってるぐらいお久しぶりです。　なんか猫が主人公なのに猫っぽくないなどの意見を貰っている小説のせいでこの小説が思いっきりスルーされてました。　後、あの運が異常な人の小説も消えました。

この小説が止まってる間に事件起こりすぎです。　吃驚です。

実は番外編とか書いてたけど間違えて消してしまい無くなりました。　何にも言えません。　はい

僕と怒江ちゃんは今日、高校生になります。　ででーん！

ちなみに一人称は自分で変えました。　何か愛等さんが『君が俺って言うのに凄い違和感がある。　いや違和感しかない。　……いや、違和感の塊だ。』とか何とか言われたので僕にしました。　もっとオブラートに包んでほしいです。

てな訳で今入学式です。　わーーー

「羊君！羊君！　同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラスになれるといいね！同じクラ

スになれるといいね！」

さっきから怒江ちゃんが同じことを壊れたラジオみたいに繰り返してます。　わーーー

僕は何回、うん！そうだね！って言わないといけないのかな～。

わーーー

周りの人達ドン引きだー。　わーーーーーーー

うーむ……入学式から大変そうだなぁ、でも僕が怒江ちゃんを守らないとね！　唯一言い切れる僕の思想。

一旦カット

こんにちは皆さん、僕と怒江ちゃんは同じクラスだったよ！　やったね！　ちなみにこのやったねの8割は怒江ちゃんと同じクラスのやったねで2割は怒江ちゃんの八つ当たりで周りの人が腐ったりしなくてよかったのやったねです。

ちなみに三組だった。　どうでもいい。

今は担任が来るまでクラス待機。　皆始めて見た人ばかりで誰もしゃべらないのだ。

「聞いてるんですか！！」

皆シャイだなぁ、いや、まあ、シャイとかじゃなくて緊張してる

……シャイかな？　どうでもいいけどね。　僕は怒江ちゃんがいるならそれでいいし、他人なんてどうでもいいし、愛等さんって人間じゃないし

「帰山くん！　あなたわざと無視してるでしょ！」

僕はあれから怒江ちゃん達以外嫌いだし、人間は自分勝手だし、あのおっさんは行方不明だし、面倒くさいなぁ。　全部曖昧にしたい。　怒江ちゃん以外。　愛等さんには利かなさそうだけど……

「もう怒りました！　粛清します！」

「あ～五月蝿い五月蝿い五月蝿いなぁ、『僕への手錠を用いた攻撃を禁止したかもしれない』」

変な女は攻撃を止めた。　無理やりだけど、曖昧なのに成功率高いなぁ

「何ですか今の！？　説明してください！」

あ～、もうクラスの皆が僕達を見てるじゃないか、最初からだっけ？　どうでもいいや、他人なんて、曖昧曖昧

「……今、羊君に攻撃しようとしたよね。よね。よね？　それは私に喧嘩を大安売りで売ってるようなものよね？そうよね？　羊君の敵は私の敵、私の敵は羊君の敵、一心同体の私達に戦おうって言うの？　あなた腐って曖昧になって死ぬわよ？　やっすい命ね。　そこら辺の自販機のドリンクより価値がないわね、百五十円以下」

「……！？」

あ～怒江ちゃんが怒ったじゃないか……怒江ちゃんが怒った？
怒江ちゃんが怒った！　じゃあ、僕の敵じゃないか、こんちくしょう

……まあ、もう戦闘出来なさそうにないし、震えてるし、いいかな？　まぁ、今回は運が良かったってことでするー

「行こう羊君！　こんな危険な人間の近くにいたくないからクラスでも変えて貰おうよ！」

新発想、クラスに嫌いな人がいたらクラス替え、流石、怒江ちゃん、常人には思いもしないことを考える。

「んー……じゃあ、理事長のところに行こう。　僕が適当に曖昧に何とかするから」

物でも者でも僕の曖昧なやつ使えるしね～、面倒だけど

「うん！　じゃあ、理事長室に行こう！」

僕達は皆の気持ち悪い視線に見送られながら理事長室に向かった。
嫌な見送りだね。　どうでもいいけど

１１話だったっけ？久しぶりだから忘れたかも知れない（後書き）

子供の作文のような短さ、これぞかマぼこクォリティー（笑）

12話なんて有ったのだろうか？たぶんあるんじゃない？　言い切れないけど

主人公ダーク化

12話なんて有ったのだろうか？たぶんあるんじゃない？　言い切れないけど

「あなた達には一十三組に行って貰いましょうか」

理事長が僕達にそう言った。　どうでもい……凄く重要だね。やー

どうも、怒江ちゃん一筋の羊です。　あはは

小学生の時と別人だと言われるようになりました。　何故だろう？　わからなくもなくもなくもない。

……原因は怒江だと言っておこう。　曖昧にね。

愛等さんは何やらマイナスがどうとか言って気もする。　どうでもいい☆

☆を付けたら許されるって偉い人が言ってたかも知れないし気のせいかも知れなくもなくなくない。　曖昧だね。

僕のキャラ崩壊は怒江ちゃんと出会った時から始まってたかな？

いやその可能性も否定出来なくもないかも知れないたぶん違わなくもないかも知れない。

曖昧だよ。

歳を重ねる度、情緒不安定になるんだ。　そんな戯事誰が信じる

んだろう……怒江ちゃんぐらいかな？　言い切り。

あ～、僕も狂ってきたみたいだ。　たぶん不確定に。　狂ったか狂ってないかも曖昧にしておこう。　曖昧にだけど。

逆に超人と能力持ちの子と一緒に住んで狂わない方が狂ってるんじゃないか？　と不明確に僕は思うね。

嗚呼、不安定、不安定。

変人だね僕も。　曖昧な時点で変人か、よかったよかった。

では変人で曖昧な僕の話は適当に置いといて……冒頭の理事長の台詞に至るまでを話そうか。　面倒だけれど。

「失礼します。」

僕は普通の人を装う為、エクストリーム礼儀正しくした。

怒江ちゃんは廊下で待機中。

「ん？　誰ですかあなたは？　今は授業中じゃ……」

理事長らしきおじいさんが驚きながら僕に言った。

「はい。　授業中何ですが僕と江迎さんを邪魔に思う人がいまして……さっき殴られかけました……」

僕は辛そうな顔をした。　まぁ、表面状だけどね。

「その人の暴力を何とか避けましたが……もう恐ろしくてあんなクラス一秒もいたくありません！！　早くクラスを代えて下さい！　もうあんなクラス嫌だ……ううっ……」

泣いてみた。　涙って簡単に出るんだなぁ……

「落ち着いて下さい！　すぐにクラス替えはできませんが……とりあえず、その人の名前を教えて下さい！」

理事長は焦っている。　ふむ、涙で訴えた効果は凄いな。

「……確か、鬼瀬って名前でした……」

変な髪型だったなあいつ。　このまま訴え続けて退学にでもして貰おうかな？

ああ、僕って屑だなぁ～。まぁ、怒江ちゃんの敵だからいくら屑に成ろうとも人外と言われようとも倒すだけだ。

まぁ、社会的に抹殺するだけだからいいじゃないか。　鬼瀬って運がいいなあ。

「彼女が？　ははっ！　冗談は止して下さいよ。　彼女は風紀委員

会から推薦まで着てるんですよ？　正義に徹底的な彼女がそんな事する筈ないじゃないですか。」

何を言い出すだこの老人は。　ボケてるんじゃないか？

言い切れないなら被害者である僕達を信用するだろう？

ああ、だから怒江ちゃん達しか信用出来ないんだ。　言い切り。

「それにあなたニット帽被ってるじゃないですか。　校則違反ですよ。風紀委員は暴力的な粛正可能ですから気をつけて下さいね。」

……わかった。　暴力は止めておこうとか思った僕が馬鹿だったんだ。

変人何だから変人らしく変な解決しよう。

僕が暴力的な解決策を考えていると……

理事長室のドアが腐った。

「羊君～、暴力的に解決するんでしょ？　私も手伝うよ☆」

ナイスタイミングでご登場の怒江ちゃん。　チームプレイで解決しよう。

老人も怒江ちゃんがドアを腐らせたのを見て驚いてるし、今がチャンス。

「す……素晴らしい！！」

老人がボケた。　やっぱり刺激が強すぎたかな？　でも怒江ちゃんの能力でもっと凄いことできるんだぜ？　曖昧じゃないよ。　本当だよ。

「素晴らしい？」

思ったことをすぐ口に出す怒江ちゃん。　可愛いです。

「ここまで異常（アブノーマル）……いや、異常（アブノーマル）とはかけ離れてますね。　過負荷（マイナス）とでも言いましょうか。　あなたは新しい教室、一十三組に入ってくれませんか？」

理事長が怒江ちゃんに言った。　異常（アブノーマル）とか過負荷（マイナス）とか変な単語が出てきた。　僕は知らないな～曖昧には知ってるけどね。　愛等さん情報より

「嫌ですよぉ。　羊君も一緒なら考えますけど」

時々放つ黒いオーラも含めて可愛い怒江ちゃんが即否定した。
いい子だなぁ。

「ではあなたも入りませんか？」

僕はハッピーセットの玩具かよ！　いや、子供にとってはあっちがメインみたいなもんだしな～

この理事長は僕が異常にも過負荷にも見えないらしい。　まぁ、

ぱっと見わかんないよね。　曖昧何だけど。
僕自身も曖昧になってきたな～とか思う今日この頃。　いや、最初からだけど目立ってきたって事だよ。　アイマイマイ。　まあ、そっちの方が好都合だけど～。　いー

僕が普通に見えるのが怖いって愛等さんが言ってた気もする。曖昧だからわかんない。

「いいですよ。　その一十三組とやらに僕と江迎さんを入れてください。」

僕がそういうと悪の親玉みたいな笑みを見せる理事長。　なんかつよそー。　アイマイ。

「あなた達には一十三組に行って貰いましょうか」

冒頭に戻る。　うー

―《マイナス》って付いた教室ってどこにあるんだろう？　曖昧な僕の普通な疑問。

「理事長。　その一十三組と言う教室はどこにあるんですか？」

「そうですね……では、二年十三組の教室を使ってください。」

「……一十三組は僕らだけでしかも授業はないんですか？」

「はい、ありません。　でも『フラスコ計画』というものがありましてそれを手伝って貰います。　もちろん、給料は出ますよ。　し

いて言うならバイトのようなものですかね？」

僕と怒江ちゃんは変な計画を手伝う代わりにお金を貰えるそうだ。

しかも授業はない。　わー、学生にとっては天国だー。　曖昧な僕の旅はまだまだ続く。

たぶんね。

１２話なんて有ったのだろうか？たぶんあるんじゃない？　言い切れないけど

誤字が最近多いなぁ、誤字など見つけたら感想まで！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6004u/

アイマイ物語

2011年9月7日06時22分発行